

人生の師として

——「願生身」的な行き方を教えて下さった武田ミキ先生——

池田克文

私にとりましては、恩師とも仰ぎ、母親とも思つて親しんできた武田ミキ先生、その先生のご逝去を心よりお悼み申し上げます。

私は長年の教育実践・教育行政の時代を通じて、玉川学園の創立者小原國芳先生の教育理念・教育実践に心酔し、先生の経営されていた学園を何回も訪問して、その実情を見学させて頂きました。そして、先生の名著「師道」を何回も読み直したものであります。その「師道」の中に、教師のあるべき姿として十か条を挙げておられ、その第一条で、「情熱・信念・使命感」を強調され、結びの第十二条で、「教育は愛なり」で結ばれています。

私は、昭和五十九年（一九八四年）四月一日から四年間、学校法人武田学園に在籍させて頂きましたが、最初の出会い、すなわち辞命を頂いたとき、理事長武田ミキ先生から、その教育理念を詳しくお聞かせ頂きました。その基盤にあるものは、奇しくも、私が心酔してきた、最初に紹介しました小原國芳先生の教育理念に通ずるものが非常に多いということを知りました。そのうち、一か月も経たないうちに、先生は、先生なりの理念をお持ちになつてゐるということはもちろんですが、私としては、「情熱・信念・使命感・教育は愛なり」の実践者である

ということをも、私なりに勝手に確認させて頂き、小原國芳先生同様、そのような面で心酔し、尊敬するという存在になってしまいました。

とはいっても、ミキ先生は理事長であり、私は校長という立場であります。そのような立場で四年間、いろんな面での指導を頂きましたし、学園のこと、学校のこと、生徒のこと、教職員のこと等について、親しく報告をし、相談し、進言もいたしました。ときには学校の仕事が終わって、夕方の六時頃から十時頃まで、時間の経つのを忘れて、底冷えのする学長室で、二人だけで議論をしたこともありました。もちろん、経営者と現場の責任者という立場の違いと、世代間の相違もありますので、何事についても、すべてが最初から意見が一致するということは、望むべきものでもありませんし、望んでもいけないことでしょう。しかし、もともと、「情熱・信念・使命感」それに生徒愛」という基盤が合致しているわけですから、最初ではあるいは途中ではかみ合わなかった意見も、最後には一致して、笑顔でお別れしたようなこともありました。

一方、先生は学園の経営者として教職員を大事にされる方ですから、私的にもいろいろとご高配を賜りました。私といたしましては、先生が自分の母親と同世代ということもありまして、一面では母親に対するのと同じような親しみを持つことができ、尊敬の気持ち、いたわりの気持ち、甘えの気持ち等が私の胸の中に混在しております。時には言いにくいことも率直に申し上げたこともありましたがさすがに先生は立派でした。母親のわが子に接するように、大らかな気持ちで許して頂き、聞き入れて下さったこともたびたびありました。

今、改めて思い出して見ますと、私にとっては、人間の生き方、教師としての生き方、リーダーとしての生き方、特に常に課題を持って前向きに、情熱的に生きるという、仏教の言葉にある「願生身」的な生き方を教えてくださっ

二、教育一途の人

た、いわば恩師ともいうべき、また恩人ともいうべき誠に偉大な存在でありました。もちろん、現在でもそのとおりです。ありがとうございます。

先生は信仰の篤い方でもありました。こんどはお浄土ですばらしい仏様になられていることでしょう。合掌。